

「現代神学の課題と展望」  
現代と未来に於ける神学の領域の発展の可能性と  
宗教との関わりについての諸考察

小久保 次 郎

目 次

序

1 「宇宙の神学」

- I 生物としての宇宙
- II 宇宙の神学の目的
- III 宇宙の神
- IV 自然の回復と人間の回復
  - A 生態学的危機
  - B 生態の神学

2 「共時性の神学」

- I 明在系と暗在系
- II 明在系情報の認識と暗在系情報の発見
- III 聖書における共時性
- IV 暗在系神学の復興
  - A 暗在系神学としての東方ビザンチン神学
  - B 時空の超越 生死の超越

### 3 「宗教の神学」

- I 明在系の問い 暗在系の答え
- II 宗教の神学の二つの方向性
- III 宗教以前の宗教 宗教以後の宗教
- IV 無意識の情報化
- V 「宗教の神学」から「神学の宗教」へ
- VI 宗際性の可能性
  - A 表層的明在系宗際性
    - i 内的要因の宗際性
    - ii 外的要因の宗際性
  - B 核心的暗在系宗際性
    - iii 超越的要因の宗際性
- VII ティリッヒの宗教観と暗在系宗教及び明在系宗教との関係
  - A ティリッヒの宗教観の克服と発展
  - B 宗教の二つの方向性
    - 特殊化〔明在系宗教〕と普遍化〔暗在系宗教〕

### 4 「未来の神学」

- I 情報化社会の神学
  - A 「閉じた宗教」から「開かれた宗教」へ
  - B 神学対象の二極性
  - C 一元論と二元論
- II キリスト教と科学
  - A 宗教と科学の相補性
  - B 生体内情報と生体外情報との交換融合

## 結 語

- I 宗教の存在の意味
- II 未来に開かれた宗教

## 序

現代つまり20世紀の後半に生きる我々人間は、人類史上かつてない程の危機に直面している。世界は過密化し、そして核兵器の恐ろしいまでの人類滅亡の恐怖にさらされ、更に人間自身も精神の荒廃化が益々進み、情報によってのみ動くロボット化しているのが今日の人間の姿である。元来、人間を救済するのが宗教の役割であったが、現代に於いては宗教の役割はもっと広く、かつ、深い。人間のみならず、他の生物を救済する視点と、自然世界の救済が今日、最も要求されている。宗教の役割と責任とは益々重くなり、その働きが期待されている。

本論文では、様々な現代的な視点から神学と人間社会並びに自然世界との交流を考察することによって未来への希望的な展望を望むことにある。古来より、真・善・美は、キリスト教に限らず、すべての宗教の究極の目標である。善は古代において、美は中世において、真は近代において花を咲かせている。未来においてはたして、いかなる花が咲くのであろうか。未来に希望と喜びに溢れた花を咲かせるためには、現代に生きる我々人間が花の種を、それも良い花の種を播いておく必要がある。まさに播かぬ種は、はえぬのである。

日本の生け花では、ひとつの花瓶のなかに、いろいろな花が調和を保ちつつ、いけられている。これは未来において最も必要な多元性の調和と各部分の総和以上の完全性である。各宗教はいろいろな花なのである。

「わたしたちは数は多いが、キリストにあって一つのからだであり、また各自は互いに肢体だからである。」

〔ローマ人への手紙第12章5節より〕

## 1 「宇宙の神学」

宇宙の神学とは、宇宙全体を対象にした神学を意味する。現代は地球時代から、宇宙時代へと移行しつつある。地球という惑星にのみ生存圏を限定されていた人類が、現代は科学技術の驚異的進歩により、宇宙にまで、その活動を拡げている。旧約聖書創世紀1章1節以下において、天地創造が述べられている。自然科学的にみれば、あまり興味を惹く記事ではない。キリスト教ならびにユダヤ教の神学の関心は、絶対者なる神と、被造者なる人間との関係に集中している。聖

書の中では、神の関心は宇宙の創造論から人間へと急速に移行する。聖書の記者の主要な関心が、人間の救済という目標である以上、当然ではあるが、神学の関心と研究対象を神と人間の関係だけに、限定させておくことは現代の要請と期待に対して神学は自らのもつ責任を果たしていないことになる。本来的には神学の対象領域は、神と被造物総ての関係性を研究解明することにある。宇宙の神学は今迄の神学に欠けていた宇宙的な視点を得ることと自然世界との関わりをも視野にいれて探求するものである。人間中心的な救済観に陥りがちな見方が逆に人類滅亡の危機と自然破壊をもたらしたといつてよい。自然の回復なしに人類生存の可能性はない。

## I 生物としての宇宙

宇宙の神学の前提は、宇宙全体そのものが生物であるという理解である。かつて宇宙は誕生し、将来においては消滅する。空間としては時間とともに拡張し今もなお膨張し続けている。しかし、宇宙の空間と全質量は有限であり、更に全質量は定限である。宇宙そのものが生命体とみなす考えは、密教の大日如来にある。

キリスト教の世界においても、聖フランチェスコは、自然と人間との境界を取り去っている。生物としての宇宙は、超ロングライフの生物である。自然世界においては、素粒子レベルの超短命な物質から、宇宙のような超ロングライフな生物まで寿命は千差万別であるが、限りある存在であることに変わりはない。宇宙という意味を表すギリシャ語はコスモスであり、調和ある世界である。宇宙という大生命体の中に、数多くの小生命体が含まれている。人間は一個の自己完結した生命体でありながら宇宙の生命の中に含まれている。

更にまた人間自身の中に、数多くの細胞があり、人間の生命保存に寄与している。宇宙はマクロ コスモスであり、人間を含め全生命体はミクロ コスモスである。宇宙から極小の素粒子まで総てが関連し、一つの調和あるコスモスを形成している。このコスモスを形成存在させている存在の力が神である。コスモスの存在形式は神の顕現形式である。コスモスに対立するのが、カオスである。カオスは不調和である混沌の世界である。コスモスは生命であるが、カオスは死である。

## II 宇宙の神学の目的

宇宙の神学に限らず、神学の目的はカオスからコスモスへと存在の形式を死から生命へと回復することにある。その回復の過程が既存の神学においては人間だけに限定されていた点是否めない事実であろう。宇宙の神学の意義は全被造物におけるコスモス性のカオスよりの回復である。ローマ人への手紙 8 章19節～22節には被造物 (ΚΤΙΣΙΣ) 全体が滅びから救われる希望を持つと記している。他の被造物を差し置いて、人間だけが救済されるのではない。不幸なことに自然と人間との対立が、人間による自然の征服という意識を生み出した。しかし、自

然のカオス化は、当然のこととして自然の一部にしかすぎないところの人間のカオス化をもたらしたのである。この危険性にやっと気付いたのが、現代である。宇宙の神学の目的は極大から極小への全ての生命ある被造物の救済にある。

### Ⅲ 宇宙の神

イザヤ書40章22節には以下の様に記されている。「主は地球のはるか上に座して、地に住む者をいなごのようにみられる。」この預言者はイスラエルの神はもはやシナイ山にも契約の箱にもエルサレム神殿にも限定されないと述べている。神観の宇宙化が生じている。

現代において要求される神観は一民族や一地域や一時代のためのものではない。ユダヤ教ではユダヤ民族だけが救われるとする。キリスト教ではキリスト者だけが救われる。イスラム教ではアッラーの神に絶対的に忠誠を果す者だけが救われる。救いの条件を満たさない人間はユダヤ教でも、キリスト教でも、イスラム教でも捨て去られてしまうのである。

そして異邦人や異教人である人間は勿論、自然も救いにあずかることはない。宇宙の神学の神は、すべての人間のための、そして、すべての自然のための救いの神なのである。

### Ⅳ 自然の回復と人間の回復

#### A 生態学的危機

生態学は自然の中における各生物間との関係、そして生物の活動、存在、居住する状況、環境と各生物との関係を探求する。現代は地球の生態系の破壊が進んでいる。その大きな理由は人間による環境破壊である。つまり、自然を人工な存在に変えてゆき、その結果、絶妙なバランスをもって保たれていた自然の生態の秩序が乱されたのである。このような現代的現象は反神学に陥っている。何故ならば、神学の目的は秩序化・調和化である。神学はコスモス化への営みである。人間は神のみならず、神の被造物である地球の自然に対しても罪を犯しているのである。元来、西洋的自然観においては自然と人間とは一体化、一元化しておらず、あくまで自然は加工する対象でしかない。人間の生存に適した環境へと自然は変えられ、人工化されてきた。これに対して東洋的自然観においては、自然は加工するものではなくて、人間は自然と共存し、一体化した存在と体験的に考えてきた。自然の回復力には限界があり、限界を超えた時、自然は人類に対して全生物に対して快適かつ生存に適した生物学的環境を提供できない。現代は人類のみならず総ての生物の危機を迎えている。地球という生命体が深刻な危機に直面している。核による放射能汚染、フロンガスによるオゾン層破壊、大量のエネルギー消費による地球温度の上昇、それにとまなう異常気象、食物の中にある発ガン物質、等は今後もっとそれらの影響が増大するであろう。かつて地球の生物史の中で忽然と消え去った生物がいる。たとえば恐竜はその生活環境が激変したため絶滅したとも考え

られている。しかし恐竜自身が自然環境を破壊したのではなくて、あくまでも外部からの変化が自然に影響を与えたと考えられる。

これに対して、人類は生物史上、初めて自らの知恵と能力で生活環境を自らの生存に適するよう変化させたのである。他の生物では、自然環境に、自らの身体構造を変化させているのでまさに逆である。しかし、結果的には、自然に対するその行き過ぎた人工化が人類の生存環境の悪化をもたらしている。現在の人類の物質的繁栄は自然の犠牲の上に成り立っており、人類もまた自然のなかの一要素である故、人類もまた文明の進歩と共に自らを犠牲にしているといっていよい。

## B 生態の神学

生態の神学の役割は、人間が自然生態の中の一要素にしか過ぎないことを人間に教えることにある。人類は生態の王様ではなく、宇宙の生命の一表現形態である。神はコスモスの世界〔調和の世界〕とユニヴァースの世界〔物質の世界〕を創造した。現代においては、人間がユニヴァースの世界に関与し、ユニヴァースの世界においては神の役割を担い始めている。遺伝子工学において更に医学においては生命固体の誕生から死までが人間の管理下のもとに支配されている。元来、神と人間との正しい関係が失われたのは人間が神の戒めを破り、「善悪を知る」能力を身につけた故と創世記は語る。神との断絶に加え、自然との断絶が起こり、自然との正しい関係が崩壊しているのが現代である。生態系の中で人類は独立化へと向かっている。地球は人類のためにだけ存在するのではなく、神の被造物たる総ての生物の生存のためにある。宇宙のなかで、生態系を持つのは地球という惑星のみである。神の命令をうけて総ての生物の生命を守ったノアのように人類は総ての自然を守る責任がある。古来より地球自体がノアの箱船でもある。自然環境と生存環境の悪化は人類絶滅の可能性を大いに高めることに注意する必要がある。

## 2 「共時性の神学」

ユングが導入した共時性の概念は、大変に誤解を招きやすい概念であったにもかかわらず、今や心理のみならず宗教においても極めて重要な概念である。共時性における無意識領域間の呼応は、多くの人が体験的に感じることはできない現象である。しかしながら共時性は、非因果律ではなく、広義の因果律であり、通時性は狭義の因果律である。日本語においても「虫の知らせ」とか「第六感」という言葉がある。これらの現象は通時的な既存の実証科学・理論科学の領域に入る説明可能な現象ではない。そのために共時性の現象は科学の対象とはならなかった。しかし、科学と宗教の対話の時代を迎えた現在、共時性の概念は科学と宗教を結ぶ唯一の鍵である。

## I 明在系と暗在系

明在系〔Explicate order〕は、通時性の世界であり自然の構成原理である。これに対して暗在系〔Implicate order〕は、共時性の世界であり超自然の構成原理である。明在系と暗在系の世界をまとめると以下のように表示することができる。

明 在 系	科学 ・ 意識 ・ 通時性 ・ 自然 ・ 説明可能 ・ 自然神学 ・ 被造物
暗 在 系	宗教 ・ 無意識 ・ 共時性 ・ 超自然 ・ 説明不可能 ・ 啓示神学 ・ 神

暗在系の世界は時空を超越している。明在系の世界は時空の制限下にある。明在系と暗在系は、ちょうど表と裏の関係にある。明在系は人間の普通の知覚で、もしくは機器の援助によって認知できる情報群であり、暗在系は認知できない情報群を指す。4次元より上の世界が暗在系の世界である。

## II 明在系情報の認識と暗在系情報の発見

人間の知覚器官は生物学的観点から見ると極めて退化している。例えば犬の臭覚の鋭さや、こうもりの超短波利用による飛行、渡り鳥の地磁気の感知能力等、身近な生物においても知覚が如何に発展しているかがわかる。

しかしながら、文明の進歩と共に人類は科学技術によって、知覚能力、感覚能力を驚異的に高めている。視覚能力は電子顕微鏡によって極微の世界まで拡大され、また、電波望遠鏡によって宇宙の端までも見る事が可能である。自己情報受信能力と外部情報発信能力は無線機器ならびに光通信により超遠距離交信を可能にしたと同時に、情報の質と量に関して多大の進歩をとげている。科学技術は更に物質の成分を測定し、微量な物質の検出を可能にし、超L S Iの開発は記憶能力を向上させ、船舶、自動車、航空機は人間の運動性、移動性を格段に高めた。そして、生命情報の核である遺伝子まで操作できる段階にまで達している。本来、人間が所有していた知覚能力、感覚能力が現在の人類になるまでに相当な程度、失われたが、現代は失われた能力以上の能力を人間は獲得したのである。しかしながら、これらの能力は明在系の情報群のみに限られた能力であり、暗在系の情報群に関しては、先端的な科学技術をもってしても、対応することが、不可能である。暗在系の情報群に対応するのは超知覚、超感覚である。この分野の研究はかろうじて超心理学〔Para-psychology〕においてなされている。暗在系の情報群の知覚は、超感覚的知覚〔Extra Sensory Perception 略してESP〕によってなされる。

暗在系の情報群の量は莫大な量であり、無意識の情報群である。心理学においては、無意識の情報群は、フロイトの無意識、ユングの集合的無意識に対応する。宗教においては、暗在系の情報群の発見の方法の立場として、密教、禅、東方正教がある。禅と東方正教は共に静寂が重要視される。特に東方正教の静寂〔Hesychasm〕は神の本性に参与する霊的な実践に必要不

可欠である。

### Ⅲ 聖書における共時性

創世記 3 章 8 節では人間の元型であるアダムとエバは創造者である神の足音を聞く。創世記の記者は人間の被造物性を宣言すると同時に人間が神と対話可能な存在者として描いている。神と対話可能な唯一の被造物が人間である。元来、人間の真の住まいはエデンの園であるが、これは暗在系を象徴している。ユングはイスラエル民族の中には集合的無意識があり、この元型 [Archetype] の根源が神だと見ている。

神の足音とは、暗在系を支配する永遠絶対者の現臨の「しるし」を意味する。8 節以降では、人間と創造者である神との対話が始まる。この状態は暗在系に人間が参与している状態を示している。しかし、墮罪の結果、人間はエデンの園から追放される。この記事の思想は、人間が暗在系から分離された最初の出来事の神話的表現である。この結果、人間は暗在系の世界から、明在系の世界へと移動させられた。しかし、この劇的な変化は「肉体のバビロン捕囚」とも言うべきものであった。人間の側から見て暗在系の世界の喪失は、本来、暗在系の世界と明在系の世界の調和の中に存在する人間に不安をもたらした。これが、原罪の結果である。人間の肉体は明在系の世界の中にあり、人間の魂・精神も明在系の中にあるが、しかし、人間の魂・精神は故郷である暗在系の世界を無意識の中に記憶しており、暗在系の世界との交流の回復を渴望している。共時性の神学は暗在系の世界と明在系の世界の調和の回復を目指す神学である。イエス・キリストと聖霊は暗在系の世界と明在系の世界との断絶を回復する役割を担う。共時性の神学は暗在系の世界と明在系の世界との出会いを探究する。聖書においては、この現象は神と人間との出会いの表現、対話の表現として示されている。

### Ⅳ 暗在系神学の復興

キリスト教神学史では、暗在系神学はまず最初にグノーシス主義として現われた。グノーシス主義は、異端神学として斥けられたが、この異端神学は後に錬金術となった。暗在系神学の系譜は東方正教会のビザンチン神学へと引き継がれた。しかしながら、この東方神学は、西方神学がキリスト教神学の中心となり、更に西方神学が正統教義として確立されるに及んで、異端神学として見なされた。異端と正統という分離分割は、神学を益々不毛に導き、神学を教会の御用学問とさせた。

#### A 暗在系神学としての東方ビザンチン神学

東方ビザンチン神学の基本は、アポファティズム [Apophaticism 神の不可知性] の神学である。アポファティズムの神学は否定の神学である。明在系の否定をとうして、暗在系の真理に至るのである。近代においては、アポファティズムの神学は神秘神学を経て、



神知学〔Theosophy〕へとつながっている。東方ビザンチン神学の目的は、自即神、神即自の実践にある。それが霊的实践〔Hesychasm〕である。霊的实践は霊的観想を伴う。霊的観想は時空を超越しており、神観想に至る。カトリック神学が聖餐の化体説であるのに対して、東方ビザンチン神学は人間の化体説と言える。この神人一致の状態が神の子となる意味である。その時、人間は神の本性〔Divine Nature〕と一致するのである。東方ビザンチン神学は人間の神化〔Theosis〕に中心があり、カトリック神学ならびにプロテスタント神学は逆に神の人間化〔Kenosis〕に中心がある。暗在系と明在系の調和として人間の神化と神の人間化という双方向性をキリスト教は本来もっている。

## B 時空の超越 生死の超越

聖書における神の働きは時間と空間を超越している。神の働きは聖書の中だけに限定された働きではない。神は化石のような存在ではなく、現在も将来も生きつづける存在し続ける〈存在そのもの〉である。〈存在そのもの〉の探求は哲学であり、〈存在そのもの〉が人間に関わる時に、宗教の形をとる。世界宗教では〈存在そのもの〉に力点を置く立場の宗教は仏教であり、哲学型宗教である。これに対して〈存在そのものの働きかけ〉に力点を置く立場の宗教はキリスト教、イスラム教の救済型宗教である。神と人間の関係としては、哲学型宗教は普遍的となるに対して、救済型宗教は選択的となる。イエスは暗在系の永遠のロゴスとして不可知なる存在者であったが、明在系の世界にその姿を示した。またイエスは復活の出来事をとうして、時空のみならず生死をも超越している。これが本来の〈存在そのもの〉の在り方である。

## 3 「宗教の神学」

キリスト教、イスラム教では神学、仏教では宗学と呼ばれている各々の宗教の学問体系は自己完結性を持ち独自の救済観を定義している。しかし、共通点はキリスト教、イスラム教、仏教とも永遠絶対者による救済もしくは人間と永遠絶対者との同一化による救済である。宗教の神学は救済の普遍化と宗際化を課題としている。聖書の世界は古来より宗際化、混交化の受容と対立の世界である。受容は救済の普遍主義となり、対立は救済の排他主義となった。宗教の神学が目指す方向性は個別宗教から宗際化された普遍宗教である。総ての人間、総ての被造物を救済の対象とする超広角な神学を、現代と未来は必要としている。

### I 明在系の問い 暗在系の答え

宗教の神学性はカトリックのラーナーによって示された。神学の宗教性はプロテスタントのティリッヒによって示された。宗教の超宗教性はユングによって示された。ティリッヒは人間の生の問題を神の解答で答えるという呼応の方法〔相関の方法〕を用いる。哲学的問いを神学

的解答で答えるという形である。哲学は理性による明在系の探求であり、宗教は信仰による暗在系の探求である。ティリッヒの呼応の方法〔相関の方法〕は《明在系の問い》を《暗在系の答え》で答えるという方法である。しかし、その逆は成り立たない。《暗在系の問い》は《明在系の答え》で答えることはできない。明在系は暗在系の一表現形式にすぎない。つまり本来、明在系と暗在系とは絶対二元論の世界ではなく、明在系は限定された世界であり、暗在系の限定された一部の世界の領域が明在系である。限定された世界である明在系は人間の理性の限界の世界である。例えば、音波と光線において、ある限られた範囲の周波数だけに人間の聴覚と視覚が反応する。見えない世界、聞こえない世界の領域のほうが、はるかに広大である。精神界においても同様である。知られない暗在系の世界をプラトンはアイデアと呼ぶ。アイデアへの帰還願望が学問、宗教、芸術を生み出した。現象界の中に生きる人間はアイデアへの世界を問う。真、善、美の究極の世界を求める。明在系の人間の問いかけに対して暗在系のアイデアは答える。

## II 宗教の神学の二つの方向性

宗教の神学には二つの方向性がある。一つは各宗教の存在形式総てが、キリスト教の隠れた変形化であるとするキリスト教の普遍化、絶対化の方向性であり、もう一つはキリスト教もまた各宗教に共通する超越絶対者との関係を規定する部分的な要素にすぎないとするキリスト教の特殊化、相対化の方向性である。前者はラーナーの立場であり、例えば仏教信者といえども、隠れたキリスト教信者ということになる。総ての宗教人は顕在的キリスト者か潜在的キリスト者かのどちらかであるとする立場である。仏教信者の側からこの論理を適用すると、キリスト教信者は隠れた仏教信者となる。パラドックスに陥る。つまりキリスト教の絶対化は他の宗教の絶対化を意味している。

## III 宗教以前の宗教、宗教以後の宗教

宗教は抽象的であり、各宗教は具体的である。現代は種々な宗教が存在するが、人間の言葉と儀礼と永遠絶対者とは最低限存在する。本来の宗教の本質が人間の理解できる表現形式に限定されたのが各宗教である。人間は各宗教をたとえ信じていないとしても、宗教性を保有している。世界宗教といわれるキリスト教、イスラム教、仏教の歴史も宇宙的時間のレベルから見れば僅少である。未来においてはキリスト教、イスラム教、仏教も時代と共に変化していかざるを得ないであろう。各宗教が成立する以前に宗教が存在していたし、未来においても時代が必要とする新しい宗教が存在しているであろう。

## IV 無意識の情報化

各宗教には共通する内容がある。例えば殺人の禁止である。人間は普通では殺人をおかさない

い。各宗教を信じているから殺人を犯さないのではなく、各宗教を信じていても、いなくとも、殺人を犯さない。殺人を犯さないという行為規制は、宗教的規制でなくて、社会的規制である。従って、社会的規制が解除されると、殺人すら賞讃すべき事態をもたらす。戦争がそうである。理性は殺人ですら正当化してしまう擬似宗教を成立させる。宗教本来の役割は自然と超自然との調和の回復である。宗教の働きは無意識の情報化である。無意識の規制原理によって人間の活動原理が規定される。本能はあらかじめ生物の種類ごとにプログラミングされており、生物は自力では、与えられた自己のプログラミングを変更することは不可能である。与えられた自己のプログラミングに従うことが自然の道であり、摂理なのである。神によって与えられた自己のプログラミングを啓示し、人類全体に明瞭に示すことが宗教の役割である。理性は自己のプログラミングを啓示することに恐怖を感じる時、理性の開発したプログラミングによって真のプログラミングを隠蔽してしまう。この危険性を察した宗教家は理性ではなく観想《テオリア》の実践によって真のプログラミングを得たのである。自己の観想は自己の中に存在する無意識の領域を発見し、自然の観想は自然の中に存在する法則性の領域を発見した。神の観想は明在系と暗在系の中に存在する究極的なプログラミングを発見する。

## V 『宗教の神学』から『神学の宗教』へ

『宗教の神学』の視点はあくまでキリスト教からの視点である。ヨーロッパとアメリカのキリスト教がアジアの諸宗教、特に仏教との出会いによってキリスト教の絶対宗教としての確信に揺らぎが生じ始めたのである。キリスト教といえども宗教の一表現形式にすぎない。現代はキリスト教も否応なく、他の宗教との出会いを余儀なくせられている。国際化の時代を迎えて、もはや征服か屈服かという単純な図式では通用しない。『神学の宗教』は、キリスト教のなかに示されている普遍性の宗教の発見である。あまりにも西洋理性の影響をうけてしまったキリスト教の本来性の回復には『神学の宗教』が必要である。理性の影響をうけた宗教は高等宗教となるが、イデオロギーを主張する擬似宗教となる危険性を秘めている。神学はキリスト教会とキリスト教信者のためだけに存在しているのではなく、全人類と全被造物の救済に奉仕する責任をもつ。

## VI 宗際性の可能性

資本主義体制、社会主義体制を問わず、物質の流通の国際性が生じている。全世界は国際性を持っている点が現代の特徴である。国際性、学際性、宗際性の特徴は融合性である。

宗際性への要請は内的要因と外的要因と超越的要因がある。内的要因は『神学の宗教』の学的要請である。外的要因は諸宗教の対話の時代による価値観の共有の要請である。超越的要因は、暗在系の神学の回復による存在の連続性の要請である。内的要因と外的要因は表層的明在

系宗際性であり、超越的要因は核心的暗在系宗教性である。

## A 表層的明在系宗際性

### i 内的要因の宗際性

キリスト教本来の立場は人類総ての救済である。人類は宗教によって救われるが、宗教の観点から人類は人間となる。人間の本来所有する宗教性はキリスト教の宗教性と一致している。これが人間の総ての救済の前提である。『神学の宗教』はキリスト教の仮面の言葉を取り去り、普遍的な超越絶対者と人間との関係を取り上げる。内的要因の宗際性はカトリックにおいては東洋との霊的交流が行われている。キリスト教の普遍性はキリスト教世界の中だけの普遍性ではない。キリスト教の普遍性は、教義、信条の普遍性を意味するのではなく、教義、信条の指し示す永遠絶対を意味している。キリスト教は歴史的には自己絶対化の歴史であるが、表層的明在系宗際性によって、自己客観視が可能となり、内的要因の宗際性によって、永遠絶対者の普遍性が宗教のみならず、総ての領域においてしめされ、同時に人間の有限性が示される。《神学の宗教》は神学が総ての学問を含んでいる。永遠の真理の探求は神学であるが、同時に神学は、人間自身の探求を目指す。

### ii 外的要因の宗際性

現代はキリスト教のみならず、総ての諸宗教が出会い、対話し、相互に存在意義を認識しあっている。キリスト教世界観と各宗教の諸世界観とは相いれないとする見方が歴史的には支配していた。内的要因の宗際性に対立するのは例えば異端排斥であり、外的要因の宗際性に対立するのは例えば十字軍のような事実である。宗教的対立は多くの場合、悲惨な戦争を引き起こす。20世紀は更に東西両陣営の対立のように、無宗教国家群と宗教国家群との対立をもたらしている。

外的要因の宗教性は、各宗教の共存をととして人類の共存を図るものである。対立から対話へ、対話から融合への過程は宗教の深化を意味する。宗教の自己絶対化は教条主義となり、他宗教排斥へと発展する。聖書においても、万民救済思想と選民救済思想とが共存し、選民救済思想が克服されていない。宗教の対立は同一宗教内の内部的対立と異宗教間の外部的対立とに分けられる。外的要因の宗教性は各宗教の内的必然性の結果ではなく、人類の平和共存の要請からの結果である。宗教的人間から国際的人間への変化が外的要因の宗教性を生じさせている。

## B 核心的暗在系宗際性

### iii 超越的要因の宗際性

内的要因の宗教性と外的要因の宗教性は表層的明在系宗際性である。表層的明在系宗際

性の中心は信仰観であり、人間の現実存在の在り方に帰着する。人間の現実存在の在り方は理性の領域であるので、表層的明在系宗際性においては、信仰と理性との間には絶えざる葛藤状態が生じる。人間が信仰しようと信仰しまいと超越絶対者は人間に関わり、人間と被造物に存在の力を与える。各宗教の信仰者間の調和共存から全被造物の存在の調和共存への方向性が核心的暗在系宗際性である。超越的要因の宗際性は全被造物の存在の調和の回復を目指す。明在系は理性によって把握できるが、これは存在の表層である。宗教は存在の表層であるが、超越永遠絶対者は存在の根源である。宗教はこの存在の根源を指し示す役割を果たす。核心的暗在系宗際性は宗教と宗教との関係であるよりは、存在と存在との関係の共存調和である。宗教の役割は明在系の存在と暗在系の存在との連続性の回復にある。例えば生と死の連続性の強調は、キリスト教では復活であり、大乘仏教では成仏という思想である。宗教が宗教本来の役割を喪失する時、宗教は社会的ルールとしての道徳や、良心に訴える倫理や、強圧的な法的規制という姿をとる。存在にはそれぞれ価値と意義を有する。生には価値と意義があるが、死においても、価値と意義を有するのである。表層的明在系は理性の世界である。理性は核心的暗在系の超世界の存在を知覚できない。死はカオスではなく、存在の一形式なのである。死は決して無の存在ではない。人間は自己創造と自己崩壊とのホメオスタシスのバランスの中にある。

## VII ティリッヒの宗教観と暗在系宗教及び明在系宗教との関係

ティリッヒによれば、霊的共同体は顕在的〔Manifest〕共同体と潜在的〔Latent〕共同体いずれかの形態をとる。顕在的共同体はキリスト教であり、潜在的共同体はキリスト教以外の諸宗教である。古典的な可見教会と不可見教会の両者がキリスト教会を表しているのに対して、ティリッヒは他宗教の存在を視野に入れて、キリスト教のみが、霊的共同体を構成するのではないとする。キリスト教絶対主義による他宗教への排他性からティリッヒは他宗教に対する積極的な評価をおこなう。顕在性の根拠はキリストの啓示の出来事にある。潜在性はキリストの啓示を欠如する。しかしながら、顕在性、潜在性の区分はキリスト教の観点からの区分であって、キリスト教の枠内にとらわれている。

例えば、顕在性の根拠を仏教の『四法印』とするならば、仏教が顕在的共同体となり、仏教以外の諸宗教は潜在的共同体となる。霊的共同体を顕在的共同体と潜在的共同体とに分けるティリッヒの宗教観は宗教哲学概念的分類を基礎としており、相対的観点が特徴である。顕在的共同体と潜在的共同体の分類は真の宗際性に至る道ではない。

### A ティリッヒによる既存宗教観の克服と発展

ティリッヒは『存在への勇気』のなかで「神の上にある神」という表現を使って、神を宗

教から開放した。宗教は《神》を創造したが、《神の上にある神》は宗教を創造したのである。宗教もまた《神の上にある神》による被造物である。宗教は世界宗教といえども、その歴史は人間の存在の在り方と宗教団体の歴史に究極的には限定されている。政治や経済、科学や技術、スポーツやレジャーは宗教に関係のない分野として、独立をしている。政治や経済の独立は権力と金力が神以上の存在であることを教え、科学と技術は宗教と神を過去の無用な遺物として陳腐化してしまった。さらに科学と技術は人類共通の言語となり、生活を豊かにする財産であるが宗教は信仰を同じくする者を結合させるけれども、信仰が異なる場合は、人間同志を分離させる。スポーツやレジャーもまた人間の肉体を宗教の鎖から開放した。現代は宗教が「疑似宗教」〔Quasi-Religion〕となっている。ティリッヒによる既存宗教観の克服は、宗教の断片的回復ではなく、全体性の回復を目指している。

宗教は単なる思想運動ではない。政治運動、例えばヒットラーのナチズム等はティリッヒによれば、「偽宗教」〔Pseudo-Religion〕ではなく、「疑似宗教」である。「疑似宗教」は、人間に目的を与え、その目的のために人間を手段化する。「偽宗教」は絶対者さえ手段化する。ティリッヒは現代の個々の宗教は経過〔Process〕的な存在であって、「宗教を超えた宗教」を指し示している。現代の世界的宗教においてすらも、部分的、特殊적であって、普遍的存在ではない。「宗教を超えた宗教」は個々の宗教の融合でもなく、特定の一宗教の支配でもなく、個々の宗教の時代の終りでもない。個々の宗教が指し示している普遍的な宗教であるとティリッヒは定義する。しかし、個々の宗教が指し示している普遍的な宗教とは、個々の宗教の最大公約数的な宗教ではない。また巨大な宗教教団を造りあげることでもない。真、善、美つまり科学、宗教、芸術の三位一体の理想的な調和が保たれている事と、此岸と彼岸の連続性の回復が「宗教を超えた宗教」の到達点である。

## B 宗教の二つの方向性

特殊化〔明在系宗教〕と普遍化〔暗在系宗教〕

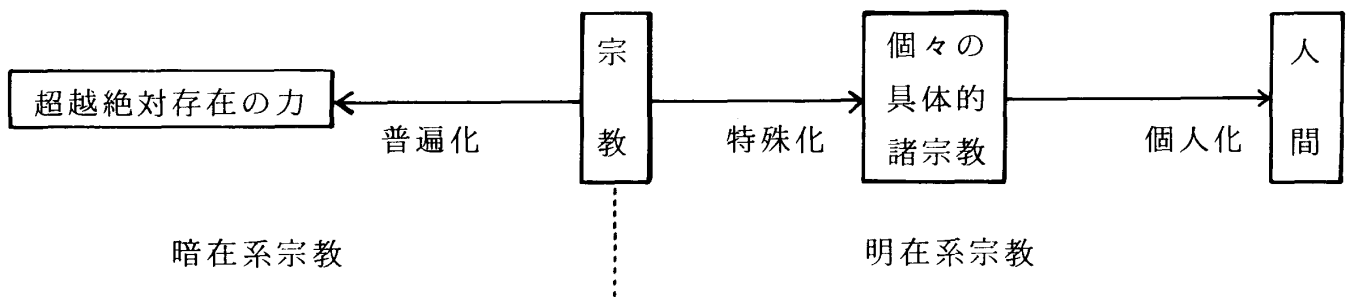
宗教は二つの方向性をもつ。一つは特殊化の方向であって、地域的、民族的、時代的、教義的に限定される。これは個々の宗教を意味し、具体的にはキリスト教、ユダヤ教、イスラム教、仏教、神道等を意味する。しかし、特殊化の方向は究極的には一個人一宗教にまで分化する可能性をもつ。但し、何億人もの信者を抱える世界宗教であろうと、信者のいない教祖一人だけの宗教であろうと、特殊化ということに関しては同じ存在である。

宗教のもう一つの方向性は、普遍化である。これは万教帰一ともいうべき方向性であり、「宗教を超えた宗教」の対象である超越絶対者との関係を根源的に樹立しようとするものである。

特殊化は明在系宗教であるが、普遍化は暗在系宗教である。特殊化は哲学的にはバークレー〔George Berkeley 1685-1753〕の立場である。明在系宗教は超越絶対者の存在を知覚的に見

える形に変換する。イエス・キリストの降下顕現というケノーシスの出来事は、神が受肉することによって、人間に知覚されるようになった存在へと変換された事実を証明する。バークレーは「存在するとは知覚されることである」 *esse est percipi* とし、存在と知覚の一体関係を示している。知覚は視覚のみならず、観念をも含む。明在系宗教においては神は視覚的对象、観念的对象に特殊化、低次元化されている。人格的な神という表現は人間の哲学的、倫理的、道徳的な領域に神を閉じ込めている。

これに対し、普遍化はケンブリッジ分析学派 [Cambridge analysts] の立場である。この立場は《知覚対象》と《対象の知覚》とを厳密に区別する。《知覚対象》は知覚できる場合もあれば、知覚できない場合もある。知覚できない存在を無存在とするバークレーの見方をケンブリッジ分析学派は否定する。暗在系宗教の神は個々具体的な諸宗教に限定された神ではなく、ティリッヒのいう「宗教を越えた宗教」の神であり、神という概念さえもはや妥当しない「存在の力」そのものである。「存在の力」そのものに神という人間の観念の枠で思弁化したところに、宗教が特殊な領域と化した最大の要因がある。



ここで注意しなければならない点は、救済に関して普遍化 (Universalization) と特殊化 (Specialization) は個々の具体的諸宗教の中においても、生じる点である。例えば、キリスト教の教典である聖書では救済はイスラエル民族だけという選民主義、もしくは救済は異邦人だけという排民主義と、救済はイスラエル民族も含めた全人類に及ぶとする普遍主義が同時に存在している。更に個人においてすらも、普遍化と特殊化が生じる。この場合、特殊化は自己のアイデンティティを求めるが見つめることができず、不安に陥る。

この個人の普遍化は自即他、他即自である。更には自即外宇宙、自即内宇宙、仏教の華嚴宗の立場である。一即一切は総ての教派、総ての宗教をさえ含むという考え方である。五時八教において最初に説かれたとされる華嚴経の優れている点は最高の仏教教典でありながら、華嚴経の究極の内容が宗教としての仏教から解放されている点である。優れた宗教ほど「宗教くささ」から解放されているのである。仏教は特殊の形をとらず常に普遍的な形をとる。しかし、他の諸宗教から見れば、普遍的な仏教の在り方は、もはや宗教ではなく哲学の形をとっている

とみなされる。

#### 4. 「未来の神学」

未来における状況、更に未来の先取りとしての現代の先端状況を考えてみた場合、悲観的な見方と楽観的な見方とがある。いつの時代においても、来る次の時代に対して、悲観的な見方と楽観的な見方とが表れた。悲観的な見方を楽観的な見方に変えるのが、過去の宗教の役割であった。しかし、現代の悲観論者は宗教に解決を求めようとしない。宗教があまりにも霊的救済に力点を置きすぎた結果、現代の物質文明、情報化社会、多文化社会に生きる人間を捉えきれないのが現実の宗教の姿である。キリスト教においては、かつて神と人間との断絶という悲劇的破局が生じたが、現代はキリスト教も含めた諸宗教と人間との間に断絶が生じている。宗教もまた人間と共に進化していく存在である。世界宗教は現代から見れば、もはや生き生きとした宗教ではなく、化石化した宗教である。ダイナミックに進歩発展する現代社会そして未来社会において重要な要素に情報と科学がある。

##### I 情報化社会の神学

神学はキリスト教会のみならず、社会にも奉仕する責任をもつ。現代という時代性は、神学を教会から引きずり出し、社会の間に神学が根本的な回答を与えることを期待している。普遍の聖書の価値を重んずる教会の存立の目的は、時代がどのように移り変わろうとも変化することはない。しかし、教会の存立する社会は常に時代と共に変化変動し、同じ形ではありえない。かつては人間と物の移動交流によって成り立っていた社会ではあるが、現代社会はもっと進化をしている。つまり、情報の移動、交換、管理という通信ならびにコンピューターの時代を迎えている。情報化社会は、いわば「肌の温もり」という人間関係が消失した社会である。今後益々、高度情報化社会へと移行する社会は人間から人間性を疎外し奪い取る。神学はこのような高度情報化社会に対応できるであろうか。むしろ神学は時代の悲鳴に耳をとじ、ひたすら過去の遺産と利子と伝統にすがっている。そのために現代人はキリスト教に限界を感じている。情報化社会では全ての情報が管理され、その結果、人間も管理化に置かれている。個人の尊厳、プライバシーが侵され、個人の記録が本人の知らない間にコンピューターに記録されている。もはや人間が人間性をもっているかどうかはコンピューターには問われない。人間に要求されるのは機械のようにエラーしないことが要求される。情報を管理していくものが、高度情報化社会ではエリートとなる。高度情報化社会では個人は人間性を剥奪される代わりに、符号化、番号化させられる。人間の《物化》が起こっている。旧約聖書ではアブラム、サライ、ヤコブが神によって名前が変えられたことを告げている。この新しい名前への変更は、神から与えられた使命のために新しく生きなおすことを意味する。人間以外の生物は自己の名前を持たない。



無名の存在として生まれ、死ぬのである。コックスは人間性を奪われた人間は無名の存在として生きることもできずに、隠れた『匿名 [Anonymous] の存在』として生きることしかできないことを示している。現代社会では人間は『名のある [Onymous] の存在』として生きることが許されない。神的權威の印は人間を『名のある存在』にすることである。神、イエス・キリスト、教会は召し出した人間に対して、新しい名前を与え、新しい生き方をも与える。新しい名前を与えられ、新しい生き方を与えられた人間は絶望から希望へと向かう。しかし、高度情報化社会は宗教を枯渇させる社会ではない。むしろ宗教にとっては飛躍の絶好のチャンスなのである。時代的な危機はいつの時代においても、宗教を本来の宗教の真理へと近づけさせる。

#### A 『閉じた宗教』から『開かれた宗教』へ

高度情報化社会において神の役割は一体何なのか。元来、人間を管理する主体者は神であったが、宗教に限定された神は高度情報化社会では陳腐な存在である。高度情報化社会は空間と地域性と体制の違いを越えて、人間同士を結びつける。コミュニケーションの手段の進歩発展は、相対的に地球そのものを狭くしている。しかし、コミュニケーションが依然一番不足しているのは、諸宗教間同士であろう。『閉じた宗教』は永遠絶対者が特定の民族、信仰者との関係をもつ宗教のことである。『閉じた宗教』は自己の宗教と他の宗教とを区別し、自己の宗教を絶対視して他宗教を斥けようとする。『閉じた宗教』の代表的な宗教はユダヤ教、イスラム教、キリスト教である。『閉じた宗教』の思想的根源は二元論である。しかし、相対的の二元論を絶対的の二元論としたところに『閉じた宗教』の限界がある。これに対し、『開かれた宗教』は特定の人間もしくは人間集団に限定されない。『開かれた宗教』の例は仏教である。仏教は神という存在から出発せずに、人間の直面する苦痛の問題から出発する。しかしながら、『開かれた宗教』が仏教だけに限定されているのではない。仏教の欠点は解脱に力点を置くあまり、結果的に現実肯定に陥ることである。『閉じた宗教』から『開かれた宗教』へと向かうということは、総ての諸宗教が仏教になるということではない。人間総てを救う視野の広さをもつ宗教、過去の宗教的思想領域に限定されない宗教が『開かれた宗教』である。

#### B 神学対象の二極性

情報化社会は根本的にはデジタル社会であって、情報の内容を記憶し通信するのは二進法の世界、つまり 0 と 1 である。この最小単位の数字によって現代の複雑な情報化社会が築かれているのである。アナログ時代からデジタル時代への急速な移行が高度情報化社会の到来を可能にしたのである。0 という《無存在の存在》と 1 という《全存在の存在》の世界は二元論の世界である。

神学の成立根拠は、二元論ではない。しかしながら神学には二元論的表現がある。例えば、聖と俗、神と被造物、生と死、男と女、幼と老、善と悪、義と罪、祝福と呪い、キリストとサタン、天使と悪霊、選民と異邦人、創造と終末、信仰と行為、コスモスとカオス、天国と地獄、正統と異端のように断絶した表現がある。しかし、この断絶した表現は絶対的二元論ではなく、相対的二元論である。相対的二元論は《二極化》であって、厳密な《二元化》ではない。神学における和解は、二元論から一元論へと回復する事実のことである。このキリスト教の和解の事実を示したのはスピノザである。神と被造物はスピノザによれば決して断絶した関係ではない。むしろ神人和楽の状態である。しかしながら、スピノザの宗教思想は教会から受け入れられず、キリスト教は絶対的二元論の世界を標榜したのである。ティリッヒはキリスト教が絶対的二元論の世界となって以来、人間は疎外〔Estrangement〕された状況に追い込まれたと見ている。二極性とは、あくまで相対的存在であって、例えば磁気のN極、S極がそうであるように単極〔Monopole〕として存在できないことを意味する。神は単極として存在できない。同様に人間もまた単極として存在できない。絶対的二元論は神と人間をそれぞれ独立の単極とし、存在の分割をもたらした。

### C 一元論と二元論

一元論は主体と客体とが合一している。これに対し二元論は主体と客体とが分離している。人間が内部に固有に持つ情報が超越絶対者の情報世界から切り離された状態が二元論の世界である。共時性の世界はこれとは逆に人間が内部に固有に持つ情報が超越絶対者の情報世界と重なり合っている。共時性の世界は一元論の世界である。一元論の世界は超越絶対者との間に直接性があり、二元論の世界は直接性を持たない。歴史を見ると、常に一元論と二元論の分野がある。一元論では絶対者と人間との間に霊的一致を求めようとしたグノーシス主義がある。錬金術〔Alchemy〕は物質と霊との結合一致を探求し、芸術は美の世界の存在を知覚的に理解できるようにした。芸術は人類共通の財産であると同時に人類を平和に結びつける。神は宗教のみならず芸術においても、自らの存在を人間に知らせる。

一元論の宗教は暗在系宗教であり、この方向性を指し示す宗教の形として例えば、仏教の密教、キリスト教の神秘主義がある。超自然と自然との結合と調和がこの一元論にある。

二元論は古代神学の父オリゲネス、そして中世神学の父アウグスチヌス神学の系譜である。しかしながら、これらの神学の系譜は神と教会が絶対的存在として擬似宗教と化す危険性が内包されている。その是正がスコラ哲学〔Scholasticism〕であった。スコラ哲学のアベラール〔Pierre Abelard ラテン名 Petrus Abaelardus 1079～1142〕は「普遍は個物の中に存在する」という立場をとった。これは神が人間の中に存在することである。ローマ人への手紙1章20節は、神性が被造物に現われていると語る。アベラールは一元論へ回帰しようとしたの

である。アベラールの一元論は神と被造物、とりわけ人間との一元論である。

しかし、アベラールの一元論は、神とキリストと聖霊を一元化し、キリストと聖霊を神の様態にすぎないとするサベリウス主義の神学であるとクレルヴォーのベルナール〔Bernard de Clairvaux ラテン名 Bernardus Claravallensis 1090～1153〕は批判をしている。クレルヴォーのベルナール自身は神の合体という一元論を唱えている。

ティリッヒはアベラールを主観主義の立場と見ている。そしてベルナールもまた主観主義の立場をとっていると見ている。アベラールもベルナールも一元論の立場をとっている。

両者の区別はアベラールの立場では神が人間の中に入ってくるのに対し、ベルナールの立場では人間が神の中に入ってくるということである。神が人間の中に入ってくることはキリスト教の原点であり、人間が神の中に入ってくることは神秘主義の原点である。神と人間の一元論は、しかしながら、神が人間の中に入ってくる方向は人間によって十字架において終結し、人間が神の中に入ってくる方向は人間の犯した原罪によって、神の一方的宣告により拒絶された。一元論と二元論の区別は以下のように分類できる。直接に神の救いの知識に与るグノーシス的立場は主体と客体の結合の観点からは二元論とはならず、一元論となることは注目できる。

グノーシスの一元論は林道義が言及している（林道義編『ユング心理学の応用』みすず書房 1988、87頁）。

二 元 論	教父哲学 ・ 中世スコラ哲学 ・ 科学 ・ 自然 ・ 明在系宗教 キリスト教 ・ イスラム教
一 元 論	グノーシス ・ 錬金術 ・ 芸術 ・ 超自然・ 暗在系宗教 仏教の密教 ・ 神秘主義

「未来の神学」においては、二元論と一元論の調和が必要である。元来、宗教は全方向性を目指す精神的且つ物質的活動の総体である。宗教が各個別の宗教形態をとるようになったことは、宗教学的には進歩したわけであるが、被造物自体に超越絶対性の交流が存在する点を見逃してはならない。

## II キリスト教と科学

科学は自然科学、人文科学、社会科学に分類されるが、キリスト教に最大の挑戦をし意識革命を迫っているのは自然科学である。特に自然科学の中でもとりわけ最先端医学の領域や生命科学の分野に於いてキリスト教は深い問いかけをなされている。

### A 宗教と科学の相補性

キリスト教は他の被造物に対して、人間を絶対化するが、科学は人間を相対化する。科学と宗教、科学とキリスト教は本来相矛盾する存在ではなく、共に絶対者、絶対真理を求める

過程である。人間の学的探究、精神的探究は絶対心理に限りなく近似的に接近していく営みである。現代において、更に未来において要求されるのはキリスト教では科学への理解と、学問的寄与であり、科学ではキリスト教も含めた個々の宗教への理解と、寄与である。宗教と科学との間には現代では深い断絶が生じている。人間は宗教的人間であると同時に科学的人間である。宗教と科学との分裂は人間個人は勿論、人間集団においても分裂をもたらしている。宗教は元来、科学思想を内包していたが、宗教の関心が人間の魂に集中した結果、科学は宗教から独立してしまった。人間の心は二方向性を持つ。一つは宗教的次元の魂であり、もう一つは科学的次元の精神である。魂は宗教性を求め、精神は科学性を求める。ここに人間の心は宗教と科学へと分裂をしてしまっている。しかし、未来の神学では宗教と科学の結合によって救済の新しい道が開けるであろう。

## B 生体内情報と生体外情報との交換融合

遺伝子工学は生体内情報を人為的に操作することを可能にした。今迄地球上に存在しなかった生物を人間は誕生させている。神の役割を人間が今や果たしている。さて生体内情報の核は遺伝子であり、生体外情報は宇宙の活動によって与えられる。生体内情報の極小レベルはクオークであり、生体外情報の極大レベルは宇宙外も含んだ巨大な存在である。科学の研究は、今後益々、極小レベルと極大レベルの存在を探究していく。華嚴經の教えでは極小レベルと極大レベルは互いに重なり合っている。クオークの内部にはミクロ・宇宙があり、巨大宇宙も宇宙外存在を考慮する時、巨大宇宙もまたミクロ・宇宙である。

仏教は、現代物理学に思想的に多大の寄与をしている。仏教は存在を考えている宗教である。生体内情報と生体外情報との交換融合は存在を考える際には必要不可欠である。未来の神学は存在を尋ねる学問であると同時に存在間同士の関係性を尋ね求める学問である。

宗教の持つ情報、科学の持つ情報、そして総ての情報が一つの根源から流出すると見る見方は新プラトン主義の立場である。これから益々未来に向けて知識の流出がなされるが、宗教の知識、科学の知識がいかように増えようとも人間自身が抱えている問題は解決しない。生体内情報は核の遺伝子によって決定されるが、遺伝子だけでは進化の説明や、魂や精神の存在は解明できない。科学はあくまで物質の存在、自然法則の解明が主たる目的である。生体内情報は生体外情報の影響を受けて、つまり生体外情報の読み取りを行って、生体の変化を行う。生体内情報と生体外情報の断絶が二元論に他ならない。宗教は生体内情報を人間の問とし、生体外情報を神の答えと表現の変換をしているだけである。

## 結 語

### I 宗教の存在の意味

宗教は人間の存在の意味を問うと同時に、人間は宗教の存在の意味を問う。宗教は人間を必要とするが、人間は宗教を必要とする場合もあれば、必要としない場合もある。宗教が一番身近に感じられる時、それは冠婚葬祭の時であろう。冠婚葬祭は人生の危機もしくは転機である。人間は新しい環境、状況へと移行する時、心身共に危機的状況を迎える。

危機的状況の回避の技術として人間は宗教を創造した。過去から未来へと限りなく危機的状況は続くため宗教は未来においても消滅することはない。救済の対象は心だけではなく、物質にも及ぶ。更に、救済は人間だけではなく、全ての生物に及ぶ。宗教は進化・発展するものである。宗教を信じるということは、教義や教理にしがみついて、他のものが目に入らない狂信主義や、完全性を求めて厳格主義に陥ることではない。また、宗教団体の組織のメンバーになることや、ひたすら自己の信ずる宗教の布教伝動をなし、他の宗教を非難排斥することではない。宗教を信じるということ永遠性との合致を目指すということである。神の営みケノーシスと、人間の営みテオーシスが宗教には不可欠である。神人和楽、神人共食がケノーシスとテオーシスの極致の状況である。既存の宗教は生と死を対立した存在と考え、死の克服をもって宗教の究極的な目的としている。肉体的な死の克服は医学の進歩によって徐々にその障害が取り除かれつつある。元来、宗教の領域と考えられてきた死の克服は医学が肩代わりをなし、心の領域もまた、心理学、精神医学が科学的解明を行っている。宗教固有の領域がまさに失われようとしている。しかし、この傾向は良い傾向である。宗教の聖域は、本来、感覚的な場であると見られていたが、厳密には宗教の聖域は時空を超越した超感覚的な場である。

宗教が宗教に限定された時、宗教は人間との一致を失う。現代の宗教の一つの欠点として神中心より人間中心になる欠点をもっている。創唱者として教祖の絶対的権威が神的権威と混同されたり、宗教団体の長が帰命の対象となったり、利益誘導型の宗教となったりする危険性が宗教を絶えず脅かしている。宗教はプロッホが言うところの「同一性の故郷」を人間に指し示す使命をもっている。自己自身との同一性を人間は原罪によって喪失し、希望に満ちた人生の代りに絶望という状況が生じた。絶望からの回復と救いはキリストの到来と昇天との間に究極的に示されたにもかかわらず、キリスト教のなかにキリストが限定されてしまった結果、キリストの真理はキリスト教だけの真理としてキリスト教界に専有化された。しかし、こういった現象は他の諸宗教においても見られる現象である。プロッホは、宗教というものは未来という希望の神が中心にあると理解している。現代は聖なる場を喪失したが、神をも喪失している。それに対して、人間が半神となり、神の権能を部分的に獲得している。人間の神化はまず自然

科学の発達によって加速度的に行われた。物質界を征服した人類が次に目指している目標は精神の解明とその征服である。

人類の共通の神とはどのような存在か。本論文の中で述べたように、個々の諸宗教の教理に彩られた神ではない。たとえ、宗際化の時代を現在と未来にかけて迎えているとしても個々の諸宗教の枠内に留まって自己の宗教を基盤にしている限り、単なる諸宗教間の対話に終わる。宗教者は自己の宗教の教義、教理に逃げ込むことなく、変革と創造への勇気が要請されている。ティリッヒは「自分自身を超克することを意志する生が善い生であり、そして善い生とは勇気ある生なのである。」〔ティリッヒ著作集 第9巻『存在と意味』大木 英夫訳 白水社 1978 p. 39〕と述べている。宗教において、ティリッヒの表現を変形させるならば、「自己の宗教を超克することを意志する宗教が善い宗教であり、そして善い宗教とは勇気ある宗教なのである。」ということになる。

## II 未来に開かれた宗教

来る未来に開かれた宗教とはどのような宗教であろうか。過去において世界的大宗教、地域的宗教、民族的宗教、時代的宗教とさまざまな宗教の型があるが、依然、宗教を信じることは宗教に束縛されることにつながっている。「宗教を超えた宗教」、「宗教から開放された宗教」が未来志向型の宗教である。歴史的に過去の諸宗教は多くの思想家、宗教家によって、その本質が研究されてきた。しかし、「未来の宗教」をフィードバックして現在において「未来の宗教」のあるべき姿を考えることは殆どなされていない。未来においては現代の諸宗教は各々相当な変化を遂げていることが予想される。また新たな宗教が形成されている可能性も高い。また逆に形骸化した宗教儀礼にあくまで固執しているかもしれない。ベラーは「市民宗教」として神なき宗教、教義なき宗教を提唱している。

「市民宗教」の立場は宗教の儀式化、儀礼化の側面の徹底である。宗教祭儀が宗教より独立したり、宗教祭儀が形式化し、表層的になるとこの現象が生じる。日本ではクリスマスはキリスト教徒であろうと、非キリスト教徒を問わず、一般的に受け入れられている。逆に世俗化したクリスマスがキリスト教会のクリスマスの在り方に影響を及ぼしている。世俗化と世俗主義化を区分したのはコックスであるが、宗教は必ずこの両側面をもっている。宗教は元来、矛盾対立する表層的現象を止揚する働きである。これがテオーシス〔Theosis〕である。これに対し、永遠者との一致が失われ矛盾対立する表層的現象である聖と俗に分離したり、もしくは聖から俗へと移行するのがケノーシス〔Kenosis〕である。

聖は存在論〔Ontology〕の領域であり、俗は実存論〔Existentialism〕の領域である。聖と俗の関係は宗教と哲学の関係である。ティリッヒによると哲学者は実存論的決定を避けることができず、そして神学者は存存論的概念を避けることができない。

このティリッヒの見方は、聖と俗の中に生きる人間の永遠の状況である。人間は俗という実存の中にありながら、聖という存在の根源を常に求めている。聖にも俗にも安住の地を得ることのできない人間は、常に自己同一性の故郷を求めて漂泊の旅を続けている旅人である。この旅人の目的地はブロッホ〔Ernst Bloch〕の言葉を使うならば、人間の「最終状態《Endzustand》」である。自己実現の過程が旅なのである。この見方はティヤール・ド・シャルダン〔Pierre Teilhard de Chardin, 1881～1955〕の見方ではオメガ点である。このオメガ点こそが、キリストに他ならないとティヤール・ド・シャルダンは結論づけしているのである。

「キリストは諸存在のまさに自然的進化の終局点である。」〔ティヤール・ド・シャルダン 宇佐見 英治 山崎 庸一郎 共訳『神の国・宇宙讃歌』みすず書房 1968 P. 285〕

これがティヤール・ド・シャルダンによる人類の旅の結論である。ブロッホは人間の始原性へと立ち返ることによって、希望を見出そうとし、ティヤール・ド・シャルダンは究極の進化において、人類とキリストは一致するとみなしている。ブロッホもティヤール・ド・シャルダンも永遠性との一致をもって、人間がテオーシス化し、救済されると考えている。

しかし、テオーシス化の方向性もケノーシス化の方向性も、ティリッヒの理解では宗教の垂直線的な次元である。この方向性は神秘主義を内面に含んでいる。「未来の宗教は水平線的な次元と垂直線的な次元の調和が必要である。」〔ティリッヒ著作集 第4巻 白水社 1979 P. 47〕とティリッヒは主張する。

ティリッヒの未来の宗教の存在は楽観的ともいえる見方である。何故ならば、水平線的な次元と垂直線的な次元の調和こそが未来の宗教の最大の課題であるのがその理由である。人間は宗教性を始源的に持っている。そのことは、人間を究極的な宗教へと向かわせる動因になると同時に、ケノーシス化とテオーシス化の前提でもある。

ここで、聖と俗の分離という悲劇的な可能性を指摘しておかなければならない。聖と俗の結合性は宗教性である。これに対し、聖と俗の分離は反宗教性である。ティリッヒが罪と呼び、Estrangement《疎外、離反》と呼んでいる状況である。キリスト教においては、終末と呼ばれている状況は聖と俗の徹底的な分離を意味している。神と被造物世界の分離は、もはや被造物世界の存在をゆるさない。終末という状況はたんなる宇宙の終わりを意味するのではなく、時間と空間の中に位置づけられている被造物世界の存在自体の無を意味するだけではなく、永遠性の崩壊をも意味する。つまり、神の崩壊と被造物世界の崩壊をもたらす状況が終末である。この終末的状況を克服する役割が、「神以上の神」に負わされている。人間が神の役割を荷うようにまでなった現在、「神以上の神」の存在の要請は当然ではあろう。

さて、《未来の宗教》と《宗教の未来》では、前者では総合化が起こり、後者では分裂化が

起こるであろう。未来に開かれた宗教とするためには、まず、宗教自体が開かれた存在となる必要がある。宗教の形をとるのも宗教であるが、宗教の形をとらないのも宗教であることに注意すべきである。以上の点をふまえて「未来の宗教」は「現代の個々具体的諸宗教の未来」ではないことが外挿できるであろう。